

 ようこそ、桑洼村へ

もし、自分が生まれ育った場所の地図が存在せず、見知った作物の名を過去に文字記録した人もおらず、あなたがそれに最初に取り組むことになったとしたら…… さらに食卓から掃除、洗い物まで、自分の家族の日常をいつもビデオカメラで記録されるとしたら…… これから数回に分けて、そんな奇妙な経験を引き受けてしまった、ある中国の農家のおじさんをご紹介します。

かつて村のリーダーをしていたという、おじさんの名は毛水源。彼が住む桑洼村は、起伏の激しい黄土高原に位置する延川県の典型的な農村です。約50戸、300人ほどの村人たちは、深い谷を挟んだM字状の丘陵地に住んでいます。出稼ぎに出る若者や街の学校に通う子供も多いので、普段、村にいるのは半数ほどでしょうか。稟畑が広がるこの村には、厳しい自然と折り合いをつけて、巡りゆく季節と共に歩む、どこまでもしっかりとした暮らしのかたちがあります。

 闇夜の秧歌と「解手」

桑洼村をはじめて訪れたのは、2008年の冬、陝北への初旅の最後でした。前日の大雪のせいで、村への山道は粘土質の黄土の沼と化し、ついには凍り始めました。何度も立ち往生する車を“乗組員”総出で押し引きするのにウンザリした私は、必死に運転してくれている案内役の馮奮さんに「もういいよ。街に戻るか、他の村に行こうよう」と泣きつく始末。しかし、なぜか彼は諦めません。結局、普段2時間で着くという道のりを5時間もかけて、ようやく辿り着いた時には、既に陽が落ちていました。

停めた車のフロントライトを消し、車から降りたその瞬間…… バンバン！バンバンバン!! と爆竹の音が響いたと思うと、ドラやラッパが騒々しく鳴り始め、真っ暗闇の前方から突如、色鮮やかな衣装をまとった秧歌隊が近づいてくるではありませんか！ 白いタオルを頭に巻いて、武術家のように激しく演舞する男性陣と、お手製の剪纸を貼り付けた花灯籠を両手に揺らし、優雅にス



ヤンガー
夕暮れの村を色鮮やかな衣装をまとった秧歌隊が行く



毛家の一族

トップを踏む女性たち。輪になった隊列の中央にすくと立ち、堂々としたよく通る声で歓迎の歌を歌い出したその長老風の男性が、毛おじさんでした。

聞けば、日本からの客人をもてなそうと、急遽出稼ぎ先から村に戻り、秧歌隊を準備して私達を待っていてくれたとか。サプライズを狙った馮奮氏が、どうりで桑洼行きを諦めなかったわけです。その夜は秧歌に続いて、「説書」と呼ばれる語り部による物語りや、村人達の民謡(民謡)歌合戦が始まり、村にはとめどなく歌が響きわたりました。そう、桑洼村はここ延川県で秧歌や民謡で最も名の知れた村の一つだったのです。

話は飛びますが、「茅房」と呼ばれる窑洞のトイレは、中庭を抜けた門の外にあります。宴もたけなわ、そそくさと外に抜け出した私に気づいて、毛おじさんが懐中電灯片手に追いかけてきました。「都会から来た日本人が、

茅房の穴に落ちたら大事だ」。

初めて村にやってきた日本人の「茅房への旅」を、門の脇で見守っていたおじさんは、私が帰還するなり、言い出しました。「用足しをなんで“解手”っていうか、知ってるかい？」ポカンとする私に、毛おじさんは古の昔、強制移住の途上で、人々は用足しの時だけ互いに縛られた手の紐をほどかれた、という話をさっき見てきたかのように物語り風に話して聞かせてくれました。「わしら毛家も、恐らく明代に、無理やりこの村にやってきた。ときどき“解手”されながらね。好きな時に用を足せないなんて、想像を絶する辛さだよ。どんな言葉にも、先祖が来た道があるっていうものだ」。

満足げに顔きながら話すおじさんと、新月の夜に見たことがないほど深い漆黒の闇が広がり、それがなぜかとても暖かく感じられたのを今も覚えています。



毛おじさんとその家族

次にこの村を訪れたのは、同年の夏、毛おじさんの長男の結婚式に招待されたのがきっかけでした。お嫁さんは、馮奮さんの姪っ子です。驟馬に乗ってやってくるお嫁さんを村の秧歌隊総出で迎えた盛大な結婚式については、別の機会にお話しましょう。

この時感じたのは、この村はとても「健やか」だということ。この地域には、すでに過疎化して手入れも行き届かず、立ち枯れた果樹が目立つ村も多くあるのに対し、桑洼は人々も家々も畑も、山道を自由に闊歩する家畜たちも、みな生き活きとしている、そんな印象をもちました。

そして何よりも、私が勝手に「風の谷」と名付けた谷を囲むその美しい地形に魅せられた私は、毛おじさんに頼みこんで、家の5穴ある窑洞のうちの1穴に、寄宿させてもらうことにしました。

一緒に寝泊まりするのは、末娘のチッチィです。チッチィは高校は通い始めてすぐに辞め、今は村に帰って家事手伝い中。毛おじさんと働き者の奥さんには、6人の娘と1人息子がいます。上の娘たちはすでに他村の農家や街のマントウ屋に嫁ぎ、長男夫婦は延安で自動車修理工として働いているため、普段は夫婦とチッチィ、牛一頭、猫一匹の静かな暮らしです。

チッチィは言います。「私の人生、今が一番自由。長い一生のほんの少しの間、ぼっかり空いた穴みたい。子供のときは学校に縛られ、これから数年後には、親が決

めた結婚相手の家の人間になるんだから。この村がけっこう好きなのに」。桑洼の住人は全員同じ毛姓の宗族です。特に陝北に毛姓は少ないそうで、同姓結婚はご法度。チッチィが姉達のようにこの村を離れるのは、そう遠い日ではなさそうです。

さて、子沢山の毛さん夫婦には、五十代半ばにしてもう8人の孫がいます。去年の年の瀬は、嫁いだ娘たちが家族を連れて、初めて揃って帰省しました。三輪トラックの荷台に毛布にぐるぐる巻きにされた幼子たちと買い込んだ食材を載せて、零下15度の寒空の中、何時間もかけて彼らは戻ってきました。女性陣はおしゃべりしながら餃子作り、男たちは麻雀、子供は雪合戦……30人もの大所帯での年越しの賑やかなことと言ったら！

正月二日の朝、次々と毛家を後にする子供達の家族を見送りながら、「こんな春節、たぶんもう一生ないだろう」と呟く毛おじさんの姿がありました。この地域では嫁いだ娘は通常は夫方の家で年越しするのが習わしで、さらに学校に上がった孫たちは迫りくる受験戦争に備えねばなりません。家族みんなの“最後”だという予感が、余計賑やかな雰囲気盛り上げていたのかもしれない。



農民の“文化”

毛おじさんの誇りは、手塩にかけて育てた立派な棗畑と子供達です。「みな頭はよくないが、中学校を卒業させることができた。親孝行ばかりだ」と胸を張ります。

おじさん自身は、小学校卒業後、12歳から農作業に精を出してきました。村から中学に合格した8人のうち、おじさんだけが進学を諦めたといえます。当時は文化大革命の嵐が吹き荒れ、村の民営小学校の教師だった父親は職を解かれ、貧窮を打開するため武器を手に闘争に明け暮れる毎日。長男だった毛おじさんは唯一の働き手として、やむなく農業生産隊に参加します。その後、文



革時の罪で父親が10年間あまり投獄されると、その間、おじさんが労働点数を稼ぎ、母や幼い兄弟を支えました。しかし、学校に通えなかったことは今も一番の悔いとして残ります。

「子供の時から毛筆が大好きでねえ。年の瀬になると隣近所はこぞって、わしに春聯書きを頼みにきたもんだ。漢字は村の經理の仕事に必要で、独学で一字一字覚えていった。だから今も書けない字は多い。でも、そんな時は子供たちが字書を引いてくれるから安心だ」。

最近の雨の日や農閑期には、一人静かに窑洞に籠って筆をとり、手記をしたためる時間を何よりも大切にしています。

実は文革以降、桑洼村の秧歌の火は何十年も途絶えていました。今世紀に入り、民間芸術の指導者であった馮奮さんのお父さんに励まされ、毛おじさんは皆の記憶を寄せ集めて、伝統的な秧歌を復活させるべく立ちあがります。すでに消費社会に入り、人々がお金で動くようになってしまった昨今、金銭的見返りが無い趣味活動としての秧歌隊を、個人の力で組織する難しさを思い知ったと、回想します。

「学校に通っていない農民の自分には“文化”がないとこれまでずっと思ってきた。でも、農民には農民の立派な“文化”があると、馮さんに言われてやっと気づいたんだ」。秧歌を楽しそうに歌い踊り、村のお年寄りを尋ねて民謡の歌詞を記録し、農民の文化や考え方について蘊蓄を交えながら、私に懸命に教えてくれる毛おじさんには、「文化」とは何か、ものを学ぶとはどういうことかを、常に教えられています。

そんなおじさんを友人たちは、「博士生導師(博士課程の学生=わたしの指導教官)」と呼んでからかいます。恥ずかしそうに手をあげて怒った素振りをするけれど、本人はそれほど悪い気はしてなさそうです。



次回の予告：

意味はないけど、地図を作ろう

今回は、毛おじさん自慢の棗づくりと、初めての地図づくりについてです。桑洼村での四季の暮らしをご紹介します。

★丹羽朋子(にわともこ)——

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍。中国・陝北地域の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして書籍や展覧会の企画に邁進中。

yī jiǎn méi

一 剪 梅

娃娃:詞 陳怡:曲

一.

zhēn qíng xiàng cǎo yuán guǎng kuò
真 情 像 草 原 广 阔
céng céng fēng yǔ bù néng zǔ gé
层 层 风 雨 不 能 阻 隔
zǒng yǒu yún kāi rì chū shí hòu
总 有 云 开 日 出 时 候
wàn zhàng yáng guāng zhào yào nǐ wǒ
万 丈 阳 光 照 耀 你 我

二.

zhēn qíng xiàng méi huā kāi guò
真 情 像 梅 花 开 过
lěng lěng bīng xuě bù néng yǎn méi
冷 冷 冰 雪 不 能 掩 没
jiù zài zuì lěng zhī tóu zhàn fàng
就 在 最 冷 枝 头 绽 放
kàn jiàn chūn tiān zǒu xiàng nǐ wǒ
看 见 春 天 走 向 你 我

三.

xuě huā piāo piāo běi fēng xiāo xiāo
雪 花 飘 飘 北 风 萧 萧
tiān dì yī piàn cāng máng
天 地 一 片 苍 茫
yī jiǎn hán méi ào lì xuě zhōng
一 剪 寒 梅 傲 立 雪 中
zhǐ wéi yī rén piāo xiāng
只 为 伊 人 飘 香
ài wǒ suǒ ài wú yuàn wú huǐ
爱 我 所 爱 无 怨 无 悔
cǐ qíng (cǐ qíng)
此 情 (此 情)
cháng liú (cháng liú) xīn jiān
长 留 (长 留) 心 间

xīnxiāng

【わりい信箱】

活動へのご希望や会報の記事等へのひと言メッセージのコラムです。気軽にメールなどでお寄せ下さい。

◆今度、機会がありましたら、叶ママのお弁当講座をわりい主催で企画してください〜。絶対に、絶対に行きたいです。(でも、ブログを見る感じ、とってもお忙しいそうですね)どうかよろしく願いいたします。(M.T.)

◆「四川一人旅」、毎号楽しんでます。一緒に旅をしているようです。中国語、よくお出来になるんですね。羨ましいです。(京)